

ゴマサバ

Scomber australasicus

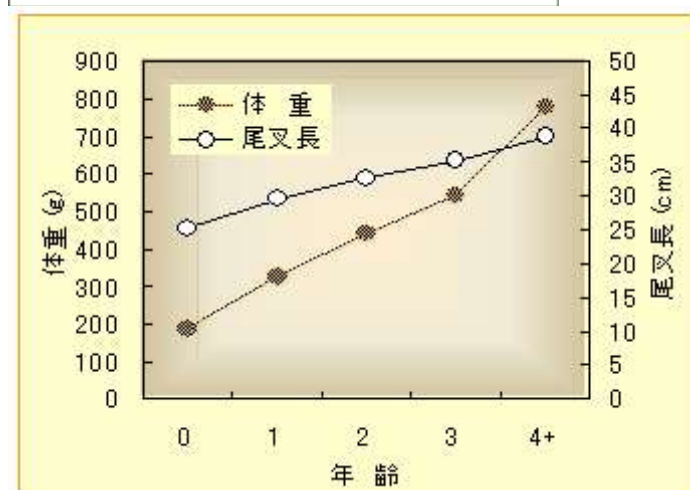
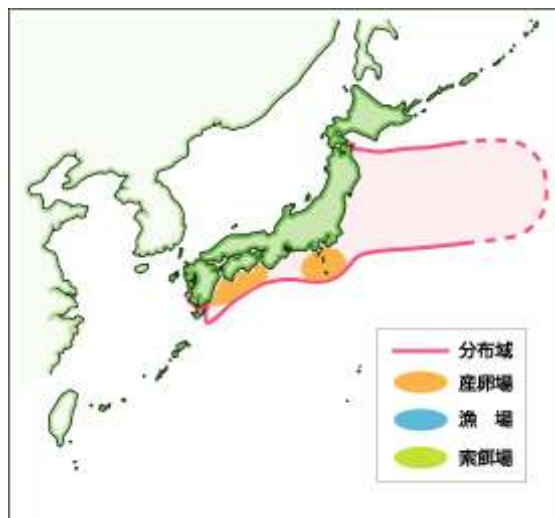
太平洋系群

担当：中央水産研究所



生物学的特性

寿命：	6歳程度
成熟開始年齢：	2歳
産卵期・産卵場：	冬～春季（2～5月）、太平洋南区、伊豆諸島周辺海域
索餌期・索餌場：	夏～秋季、主分布は房総半島以南、マサバに比べ南方性かつ沖合性
食性：	稚魚期には浮遊性甲殻類、いわし類のシラスなど、成長するとイカ類や魚類
捕食者：	カツオなどの大型魚類



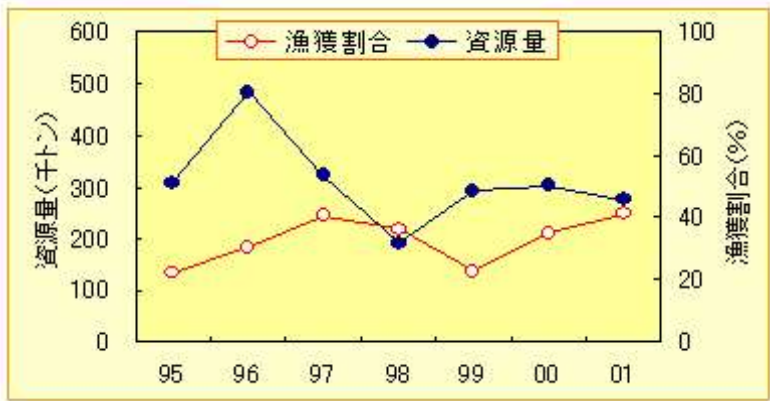
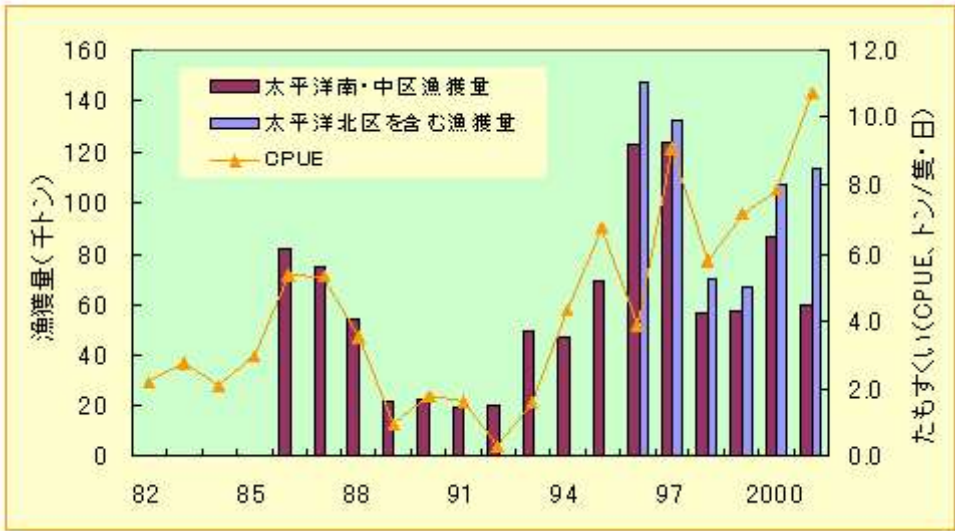
漁業の特徴

三陸から常磐海域のまき網漁業では主に秋季～冬季に、熊野灘や豊後水道・日向灘では

周年漁獲されている。伊豆諸島周辺海域のたもすくい漁業では1～6月に産卵群を主対象に操業し、年後半にも棒受け網で漁獲される。さらに中型まき網漁業、大中型まき網漁業、定置網漁業及び釣り漁業により漁獲されている。漁獲統計ではさば類として計上されているため、市場銘柄や生物測定によりマサバと本種を判別し、漁獲量を推定している。

漁獲の動向

太平洋側全体で資料が整備された1995年以降の漁獲量は、1996年の14万7千トンが最も多い。1998年と1999年には漁獲量は減少したが、2000年には10万7千トン、2001年は11万4千トンと漁獲量は再び増加した。太平洋南・中区の漁獲量が減少し、北区で増加したことが、2001年の特徴である。1989年以降、我が国200カイリ内で本系群を対象とした外国漁船による漁獲はない。



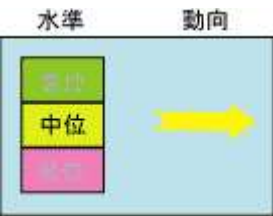
資源評価法

生物測定や年令査定結果から年別年齢別漁獲尾数を推定し、コホート解析（1月～12月を1漁期、Pope(1972)の近似式を用いたチューニングVPA）を用いて、年齢別資源尾数と資源量を算定した。プラスグループ（4歳以上）の資源尾数については平松(1999)の方法を用い、最近年の選択率は過去5年間の平均とした。この選択率の下で、0歳魚資源尾数と資源量指数（春季の黒潮親潮移行域及び秋季の伊豆諸島周辺海域における0歳魚資源量指数）が最も良く適合するように、最近年のF（選択率=1のF）を決定した。

資源状態

1995年以降の資源量は1996年が48万トンで最も大きく、1997年、1998年には減少し、1999年は増加して29万トン、2000年は30万トン、2001年は28万トンと推定された。これは1996年級群が卓越年級群であり、1997年、1998年の加入量は少なく、1999年級群が1996年級群に次いで加入が多かったことによる。1997年、1998年及び

2001年は他の年に比較して産卵親魚量は多かったが加入量は少なかった。近年の漁獲割合は1995年と1999年が22～23%と低く、1997年と2001年が41%と高い値を示している。年々の加入量の変動が大きく、再生産関係は特定されていない。



管理方策

資源を高水準に移行させることを目的とする。Flimitとして1997～2001年の平均のF（Fave5-yr）、Ftargetとしてそれに安全率を見込んだ値を採用した。Fave5-yrはFmed（近年の再生産関係プロットの中央値に対応するF）に比較してやや小さく、近年の再生産成功率の下では、資源は緩やかに増加すると推定される。

	管理基準	A B C（トン）	漁獲割合	F 値
A B C limit	Fave5-yr	92,000	32%	0.82
A B C target	0.8 Fave5-yr	78,000	27%	0.66

F値は各年齢の単純平均
漁獲割合 = ABC / 資源重量
資源量は1月の値

資源評価のまとめ

- 資源は比較的安定している
- 加入量は大きく変動し、再生産関係は特定されていない
- 1996年に卓越年級群が出現し、1999年の加入量も大きかった
- 2001年には太平洋北区で多獲され、漁獲圧もやや高かった

管理方策のまとめ

- 中水準の資源を高水準にすることを指す
- 近年の再生産成功率の下では、現状のFで、資源は維持され緩やかに増加すると推定される
- 現状のFを維持し、資源動向を見極めることとする
- 加入量当たり漁獲量はFを削減してもほとんど減少しないことから、Fの削減の方向での検討もなされて良い